

# 今、だからこそ、国家犯罪の“こだま”に耳を傾ける

～映画「100年の罅 大逆事件は生きている」～



笠岡近辺に住む有志数人で、「100年の罅」の上映会をしようということになったのは、昨年の暮れも押し迫った頃でした。友人の友人が演出を手がけたという縁と、事件に連座して死刑となった森近運平が井原出身ということもありました。個人的にはほとんど知識は無く、森近の名も知りませんでした。ただ、若い頃読んだ住井すえの「橋のない川」で、天皇のババの話（天皇もただの人間というくだり）と、大逆事件のことが出てきますが、それは強く印象に残っています。理不尽な国家権力によつ

て、多数の思想犯といわれる人々が抹殺された暗黒の時代。日本にもそんな時代が、つい一〇〇年前にあったという事を知らない人が多いのではないのでしょうか。

やるとなったらフットワークが軽いのが、おばさんたちの良いところですよ。市や教育委員会、新聞社の後援をとつて、公民館や図書館にポスター貼り。

難しい映画だから、チケットは売りやすい五〇〇円で。目標は、赤字を出さないよう一会場二〇〇枚とし、分担してチケットを持ちました。四月六日、笠岡の映画会当日は、嵐との予報にも関わらず、たくさんの方が観に来てくれました。チケット販売はクリアしていましたが、当日券も八五枚出て、皆胸を撫でおろしました。瀬戸内テレビが六時半からのニュース番組に仕立ててくれ、マスコミもすてたものではないと取材センスに拍手。一週間後の井原会場も盛況でした。

映画は、絞首刑一二名、無期懲役一二名を出した大逆事件が、どういう時代背景のなかで策略されたか。当時フランスで起きた冤罪事件ドレフェス事件との対比。犠牲者たちの名誉回復や顕彰活動が各地でなされている様子などがドキュメント風に描かれ、とても心に響く内容でした。森近は当時三〇歳。故郷井原に戻って、温室栽培など新しい農業に専念する矢先のこと

で、妻に宛てた最後の手紙には「胸が張り裂ける思い」と、無念の心情が伝わっています。これからの有為の青年たちを闇に葬ったこの事件は、一〇〇年を経た今、私たちに何を語りかけているのでしょうか？ 監督の田中啓さんも、制作にあたって、「今との接点を心に留めながら撮影を進めた」と語っています。

明治憲法のもと、彼らは大逆罪という名で国家権力によって裁かれましたが、国家の権力は、いわば時の政治を握る人々が都合よく行使できる力です。権力者と私たち国民の関係、それはどうなのか？一〇〇年前の当時と今とどうなのか？この映画は、それを問いかけているのではないのでしょうか。

国家権力というまことに大きな力から、国民の権利を守るのが憲法です。権力の乱用を防ぎ、国家権力を縛るものです。それでも冤罪事件は後を絶たず、今まさに憲法が危機に瀕している状態です。自民党の改憲草案前文に、「国民統合の象徴である天皇を戴く国家」「日本国民は国と郷土を誇りと気概を持って自ら守り」「日本国民は、良き伝統と我々の国家を末永く子孫に継承するためここにこの憲法を制定する」など、国民の権利を守るより、義務を課し、国民を縛っている印象が強いものです。今、この時代だからこそ、一〇〇年前の国家の犯罪が何を意味するのか、その罅の声に耳を傾けるべきなのだと思います。

(石井 広子)